西南学院大学
言語教育センター 紀要
第10号

2020年3月

西南学院大学 言語教育センター

目　次

〈論文〉

張淵「観象賦」訳注稿
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　栗山　雅央（１）

現代の亡霊：“Karain” にみるコンラッドのマジックリアリズム的手法と幻想の探究
Modern Ghosts : Exploring Conrad's 'Magic Realism Method' and the Meaning of Illusion in "Karain"
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　今川　京子（21）

言語教育センター　2019 年度　活動報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（31）

「言語教育センター紀要」刊行要領

「言語教育センター紀要」執筆要領

〈 論文 〉

張淵「観象賦」訳注稿

栗山　雅央

前　言

本稿は、北魏の太武帝の時期に活動した張淵（字・生卒年、共に未詳）の創作した「観象賦」（『魏書』巻九十一術芸張淵伝）について、通釈及び張淵自身の注釈に対する書き下し文を施したものである。この「観象賦」について、従来の中国文学史では殆ど取り上げられることはなく、「辞賦」に限った文学史においても注目されてはこなかった。しかし、該賦には歴代の辞賦作品でも極めて稀な作者自身が行った注釈、すなわち「自注」が施されており、この点で注目に値する作品であると言える。「観象賦」はその題目が示すように、「観象（天文を観察する）」ことを「賦」で描き出したものである。その内容分析は別稿に譲るが、端的に述べるならば、一幅の天文図とも称すべき詳細な星々の配置とその職掌を描き出すと同時に、これが現実の政治と如何に関わってきたか、そして為政者は如何にこれを重視すべきかを説いたものである。なお、本稿はあくまで訳注を主とするが、従来の文学史に鑑みるに、北朝時期の賦作品に対する訳注は、南朝時期のそれに比して充実しているとは言い難い状況にある。そのため、今後の北朝辞賦に対する研究の充実を図る上でも一定の価値を有するものと考えている。

一、張淵及び「観象賦」について

実際に「観象賦」の訳注を行う前に、作者である張淵と「観象賦」の概要をまとめておく。作者の張淵については、『北魏書』巻九十一術芸張淵伝（以下、本伝と略記）に次のように記載がある。

張淵、不知何許人。明占候、曉内外星分。自云嘗事苻堅、堅欲南征司馬昌明、淵勸不行、堅不從、果敗。又仕姚興父子、爲靈臺令。姚泓滅、入赫連昌、昌復以淵及徐辯對爲太史令。世祖平統萬、淵與辯俱見獲。世祖以淵爲太史令、數見訪問。神麚二年、世祖將討蠕蠕、淵與徐辯皆謂不宜行、與崔浩爭於世祖前、語在浩傳。淵專守常占、而不能鈎深致遠、故不及浩。後爲驃騎軍謀祭酒、嘗著「觀象賦」曰。

張淵は何許の人なるかを知らず。占候に明るく、内外の星分を暁る。自ら云へらく嘗て苻堅に事へ、堅 司馬昌明を南征せんと欲するに、淵 行かざることを勧むるも、堅従はず、果して敗る。又た姚興父子に仕へ、霊台令と為る。姚泓滅びて、赫連昌に入り，昌復た淵及び徐辯を以て対へて太史令と為す。世祖 統万を平するに、淵と辯と倶に獲らる。世祖 淵を以て太史令と為し、数ば訪問せらる。神麚二年、世祖将に蠕蠕を討たんとするに、淵と徐辯と皆な宜しく行かざるべきことを謂ふも、崔浩と世祖の前に争ふ、語は浩の伝に在り。淵は専ら常占するを守り、而るに鈎深

致遠すること能はず、故に浩に及ばず。後に驃騎軍謀祭酒と為り、嘗て「観象賦」を著して曰く。

本伝によれば、張淵は生卒年及び出自は不明であるとされる。彼の得意とするところは天文であり、苻堅や姚興父子、赫連昌に仕えた後に、北魏の太武帝が統万城を平定したのを機に北魏へと仕官する。注意すべきは、彼の任官の殆どが「霊台令・太史令」である点である。これは何れも「天文」を掌る官職であり、彼の観象能力が如何に高く評価されていたかが窺える。このように張淵自身の観象能力は極めて高かったものの、神䴥二年(429)に太武帝が蠕蠕の征伐を企図した際には、崔浩との論戦に敗れており、充分に発揮する事はできなかった。こうした状況も影響してか、後に驃騎軍謀祭酒の職を拝命し、「観象賦」を創作するに至っている。

このように張淵の本伝を見た場合、その多くは歴代の権力者に彼自身が持つ観象能力によって仕えており、こうした任官歴の流れの中に「観象賦」創作という事実が位置付けられることに鑑みれば、彼の生涯を踏まえた上で該賦を理解せねばならないことは容易に理解されよう。

「観象賦」そのものについてであるが、これは上述の通り『魏書』巻九十一術芸張淵伝に全文が彼の自注とともに採録されており、計 222 句で構成され、おおよそ三段に分類が可能である。第一段は第 1 句から第 130 句までであり、主に星々の配置や職掌を描写する。第二段は第 131 句から第 182 句までであり、天上での星の運行と地上との関わりを述べる。最後に第三段は第 183 句から第 222 句であり、為政者に対する観象の重要性の主張を行う。では、以下で実際に「観象賦」を読むことにする。

二、「観象賦」訳注稿

訳注を作成するに際しての凡例は以下の通りである。

一、「観象賦」の底本は『魏書』（中華書局、1978 年版）を用いる。

二、注については、賦本文に対する張淵自身の理解を可能な限り反映させることを目指した。なお、紙幅の都合上、張淵自注は書き下し文のみを載せ、筆者補注は自注の引用する文献の出典確認など限定的となることを先に断っておく。

三、本文は正字を用い、書き下し文は常用漢字を使用した。

四、押韻は『校正宋本広韻　附索引』（芸文印書館、2007 年版）に準拠した。また、本稿の各段落の分割基準は、基本的に換韻箇所に基づいている。

五、通釈で星座名に該当するものは、基本的に鉤括弧を用いて表記する。

「観象賦序」

○『易』曰、天垂象、見吉凶、聖人則之。又曰、觀乎天文以察時變、觀乎人文以化成天下。然則三極雖殊、妙本同一。顯昧雖遐、契齊影響。尋其應感之符、測乎冥通之數、天人之際、可見明矣。夫機象冥緬、至理幽玄、豈伊管智所能究暢。然歌咏之來、偶同風人、目閲

群宿、能不歌吟。是時也、歳次析木之津、日在翼星之分、閶闔晨鼓而蕭瑟、流火夕暵以摧頽、游氣眇其高搴、辰宿煥焉華布。覩時逝懐川上之感、歩秋林同宋生之戚、歎巨艱之未終、抱殷憂而不寐、遂彷徨於窮谷之裏、杖策陟神巖之側。乃仰觀太虚、縱目遠覽、吟嘯之頃、懍然增懐。不覽至理、拔自近情。常韻發於宵夜、不任咏歌之末。遂援管而爲賦。其辭曰。

『易』(1)に曰く、「天は象を垂れ、吉凶を見はし、聖人 之に則る」と。又た(2)曰く、「天文を観て以て時変を察、人文を観て以て天下を化成す」と。然らば則ち三極殊なると雖も、妙本は同一なり。顕昧は遐かなりと雖も、契は斉しく影響す。其の応感の符を尋ね、冥通の数を測り、天人の際、明に見はるべし。夫れ機象は冥緬にして、至理は幽玄、豈に伊れ管智の能く究暢する所ならん。然るに歌咏の来たる、偶ま風人と同じなれば、目は群宿を閲するも、能く歌吟せず。是の時たるや、歳は析木の津に次ぎ、日は翼星の分に在り、閶闔は晨鼓 蕭瑟あり、流火は夕べに暵きて以て摧頽し、游気は眇として其れ高搴とし、辰宿は煥焉として華布たり。時の逝くを覩て川上の感を懐き、秋林を歩きて宋生の戚に同じくし、巨艱の未だ終はらざるを歎き、殷憂を抱きて寐ねず、遂に窮谷の裏に彷徨し、杖策もて神巖の側を陟る。乃ち仰ぎて太虚を観て、縱目 遠覧するに、吟嘯の頃、懍然として懐ひを増す。至理を覧ずして、抜きんずるに自から情に近し。常に韻は宵夜に発するも、歌の末を咏ずるに任へず。遂に管を援りて賦を為る。其の辞に曰く。

【通釈】『周易』に言う、「天が天象を降して、吉凶の徴候をあらわし、聖人はこれに基づき判断を行った」と。また同様に、「聖人は天文を観察して四時の変化を察知し、人文を観察して天下万民の徳化や教育に努めた」と。そういうことであれば、天地人の三極はそれぞれ異なるものの、その微妙な本質は同一である。また、明るい星と暗い星は遠く隔たりがあるものの、これらが示す徴候は斉しく影響を及ぼすのである。心が物に応じてもたらされる符応を求め、遠く通じる命数を測るならば、天意と人道との関係は、天上にこそ認めることができるのである。そもそも万物を産み出す事象は暗く遙かであり、至極の道理も幽遠で奥深いものである。どうして管から覗いたような狭い知識で明確に述べ尽くすことなどできようか。それでは歌詠が創り出されることについては、偶然に所謂「風人」と同じくすることで可能となるのであり、たとえ天上の群がる星々を仔細に見続けたとしても、文章を吟ずることができるわけではないのである。今この時は、木星が「析木」の位置にあり、太陽は「翼」の分に見えている。紫微垣の南端にある「閶闔」は朝方に太鼓を打ち鳴らしたが秋風のごとく物寂しく、「流火」が夕暮れ時に凋み崩れ落ち、空に満ちる気はおぼろげに高くたなびいていき、星座はまばゆくあたかも更紗のごとく輝いている。時が流れ行くのを観てその再びは戻ってこないことに思いをやり、秋の林木を歩んでは宋玉が懐いた悲しみに我が身を重ねる。巨大な艱難がいまだ過ぎ去らないことを慨嘆し、深い憂いを胸中に持ちながら眠りに就くこともない。こうしてとうとう奥深い渓谷のうちをふらふらと彷徨い、鞭を杖代わりに霊妙なる山々

を渡り歩いていく。そこで振り仰いで天空を眺めやり、両眼の赴くままに遙か彼方までを視界に収めてみれば、歌吟の時機というものがやってきて、自分でも吃驚するほどに思いが増してきたのである。至極の道理などは顧みることなく、その詩賦を引き上げてみれば自然と自分の感情と近いものであった。いつも音声の響きは夜中に発せられたとしても、その詩賦を最後まで吟じることはできない。そこでようやく筆を手にして賦を創作したのである。その辞は次のようである。

【補注】（1）『周易』繫辞上伝に「天垂象、見吉凶、聖人象之。河出圖、洛出書、聖人則之」とある。（2）『周易』賁卦彖伝に「觀乎天文以察時變、觀乎人文以化成天下」とある。

「観象賦」

○陟秀峯以遐眺、望靈象於九霄。覩紫宮之環周、嘉帝坐之獨標。瞻華蓋之蔭藹、何虛中之迢迢。觀閣道之穹隆、想靈駕之電飄。

秀峯を陟りて以て遐きを眺め、霊象を九霄に望む。紫宮の環周を覩て、帝坐の独標を嘉す。華蓋の蔭藹たるを瞻て、何ぞ虛中の迢迢たらん。閣道の穹隆を観て、霊駕の電飄たるを想ふ。

【通釈】高く秀でた峰に登り遙か彼方を眺めやれば、霊妙なさまを天上世界に望むことができる。「紫微垣」の天帝の周囲を廻るさまを見て、「天皇大帝」の座位が独り荘厳に鎮座するのを称讃する。「華蓋」が樹木が作り出す木陰のように天帝の座を覆うのを見れば、なんと虛心に遙か高くにあることであろうか。「閣道」の天上に弓なりにかかるさまを見ては、神霊の車駕が稲妻のごとき速さで駆け抜けるのを想い描く。

【張淵自注】陟は昇なり。遐は遠なり。九霄は九天なり。紫宮垣十五星は北斗の北に在り、天皇大帝一星は紫宮中に在り、天帝は位の尊ければ、故に「独標」と言ふなり。華蓋七星、杠九星、合して十六星、大帝の上に在り。迢迢は高遠の貌なり。閣道六星は王良の東北に在り、天帝の乗躡する所、霊駕の由りて従ふ所なり。電飄は疾なり。

○爾乃縱目遠覽、傍極四維、北鑒機衡、南覩太微。三台皦皦以雙列、皇座冏冏以垂暉。虎賁執鋭於前階、常陳屯聚於後闈。

爾して乃ち縱目 遠覧して、四維を傍極し、北のかた機衡を鑒て、南のかた太微を覩る。三台 皦皦として以て列を双べ、皇座 冏冏として以て暉を垂る。虎賁は前階に執鋭し、常陳は後闈に屯聚す。

【通釈】さて、気の向くままに目を遠くへと転じてみれば、視界の端に四方の隅までをも

極めることができ、北の方角には北斗たる「機衡」を、南の方角では「太微」をそれぞれ捉えることができる。文昌台より始まる「三台」は白く耀きながら列をなして並び、太微に位置する「皇座」は明々とその光を地上へと垂らしている。「虎賁」は鋭い刃を帯びて天帝の前に侍り、「常陳」は集団で天帝の背後に控えている。

【張淵自注】四維は四方の維なり。機衡は北斗星を謂ふ。太微宮十星は翼軫の北に在り。三台は凡そ六星、両両にして居り、文昌より起ち、太微を極む。皇座一星は太微星の中に在り。皦皦・冏冏、皆な星の光明の貌なり。三台 之を太階と謂ひ、虎賁一星は下台の南に在り、故に「前階」と言ふ。常陳七星、畢の状の如くして、皇座の北に在り、皆な天帝の前後を宿衛し、非常に備ふ。闈門、宮中の門なり。

○遂回情旋首、次目文昌。仰見造父、爰及王良。傅説登天而乗尾、奚仲託精於津陽。織女朗列於河湄、牽牛煥然而舒光。五車亭柱於畢陰、兩河俠井而相望。

遂に情を回らし首を旋らし、次で文昌を目す。仰ぎて造父を見て、爰に王良に及ぶ。傅説 天に登りて乗尾におり、奚仲 精を津陽に託す。織女 朗として河湄に列なり、牽牛 煥然として光を舒ぶ。五車 柱を畢陰に亭し、両河 井を俠みて相ひ望む。

【通釈】ここでようやく思いを巡らし頭を回してみれば、次に宮殿である「文昌」を目にすることができる。仰ぎ見れば周の穆王の御者であった「造父」が目に入り、ここでは同じく御を得意とした「王良」をも視界に入れることができる。殷王に求められた賢人「傅説」は死後に天上へと昇り「乗尾」の位置におり、太古に車輿を造った「奚仲」は死してその精を天河の北に託したという。「織女」は朗々と天河のほとりに佇み、「牽牛」は文彩を備えて光を放っている。「五車」は「柱」を「畢」の北側にとどめ、「南河」と「北河」は「東井」を東西に挟んで互いに望んでいる。

【張淵自注】文昌七星は北斗の魁前に在り、別に一宮の名、皆な相の位次なり。造父五星は伝舎の河中に在り。造父は周の穆王の御、死して、精 上りて星と為る。王良五星は奎の北に在り。王良なる者は晋の大夫、御を善くし、九方湮の子なり。良は一名郵無正、趙簡子の御と為る。死して、精 星に託して、天官の馭官と為る。傅説一星は尾の後ろに在り。傅説は殷の時 巖中に隠れ、殷王武丁 賢人を得るを夢み、其の象を図画し、求めて之を得、即ち立てて相と為す。死して、精 上りて星と為る。乗尾、龍駟の間に在り。奚仲四星は天津の北に在り、河傍に近し。太古の時 車輿を造る者、死して精 上りて星と為る。水北を陽と曰ふ、河北に在り、故に「津陽」と曰ふなり。織女三星は紀星の東端に在り、牽牛六星は河鼓の南に在り。世人復た河鼓を以て牽牛と為す。五車三柱、都て十四星、畢の東北に在り。宿北に在り、故に之を「陰」と謂ふ。両河、南河・北河なり。六星は東井を俠み、東西遥かに相ひ対す、故に「相望」と曰

ふなり。

○灼灼羣位、落落幽紀、設官分職、罔不悉置。儲貳副天、庭延三吏。論道納言、各有攸司。將相次序以衛守、九卿珠連而内侍。天街分中外之境、四七列九土之異。

灼灼たる群位、落落たる幽紀、官を設け職を分かち、悉くは置かざる罔し。儲貳 天に副ひ、庭に三吏を延く。道を論じ言を納れ、各の攸司有り。将相は次序して以て衛守し、九卿は珠のごとく連なりて内侍す。天街は中外の境を分かち、四七は九土の異を列ぬ。

【通釈】熱されたように赤々と耀く天に設けられた種々の官位や、物寂しく光を湛える幽玄な規則のように、それぞれ官位や職務が適宜設けられ、あらゆるものが配置されている。「儲貳」は天帝に付き随い、太微宮の庭園には「三吏」が敷かれている。ここでは道理が議論され上下からの言説が納れられるように、それぞれに掌る場所がある。「上将」や「上相」の諸星は順次によって各々の守衛に努め、「九卿」も真珠が連なるかのように宮中に侍っている。「天街」は陰陽や中国と外国との境界を分かち、所謂「二十八宿」は九州の相違を象徴するように並んでいる。

【張淵自注】灼灼・落落、皆な星の光明希疏なるの貌なり。群位、天の三公九卿の官、皇后嬪御の位を設くるを謂ふ。分、其の司る所を分け、而して各の典る所有るを謂ふ。罔は無なり。悉は尽なり。尽くは備へざる無く、官職も亦た之有るを言ふなり。儲貳、太子一星を謂ひ、帝座の北に在り。三吏は三公星、太微宮中に在るなり。論道、三公の坐して而して道を論ずるを謂ふ。納言、尚書の替ふるべきや否やを献ずるを謂ふ。太微宮十星は皆な上将・上相・次将・次相の位有り。九卿三星は太微の庭中に在り、行列すること珠の相ひ連なるが似くして内侍す。天街二星、昴畢の間にあり、月星に近く、陰陽の分かつ所、中国の境界なり。天街は西を以て外国に属し、旌頭氈褐、引弓の民皆な焉に属す。天街は東を以て中国に属し、縉紳の士、冠帶の倫皆な焉に属す。四七二十八宿あり、角・亢は鄭国袞州、氐・房・心は陳国豫州、尾・箕は燕国幽州、斗・牛は呉国揚州、女・虚・危は斉国青州、営室・東壁は衛国并州、奎・婁は魯国徐州、胃・昴・畢は趙国冀州、觜・参は魏国益州、井・鬼は秦国雍州、柳星・張は周国洛陽・三河、翼・軫は楚国荊州なり。天に十二次有り、日月の経歴する所なり。地に十二州あり、王侯の国とする所なり。方土の出だす所の物、各の殊異不同なる者有り。

○左則天紀槍棓、攝提大角。二咸防奢、七公理獄。庫樓炯炯以灼明、騎官騰驤而奮足。天市建肆於房心、帝座礫落而電燭。

左は則ち天紀 槍 棓、攝提 大角あり。二咸は奢を防ぎ、七公は獄を理む。庫楼は炯炯

として以て灼明とし、騎官は騰驤として奮足す。天市 肆を房心に建て、帝座 礫落として電燭たり。

【通釈】東側を眺めれば「天紀」「天槍」「天棓」や、「攝提」「大角」の諸星がある。「東咸」と「西咸」はともに姦淫奢侈を戒め、「七公」は下獄に対する当否を評議する。「庫楼」は爛々とその光を灯し、騎乗を掌る「騎官」は高々と跳び上がり脚を盛んに奮っている。「天市」は「房」や「心」の辺りに市場を建て、その中心に位置する「帝座」は壮大な姿を雷光のように耀かせている。

【張淵自注】天紀九星は貫索の東に在り、天槍三星は北斗の杓の東に在り、天棓五星は女牀の東北に在り。攝提六星は大角を挾み、大角一星は攝提の間に在り。二咸、東咸四星は房の東北に在り、西咸四星は房の西北に在り、此の星は奢淫諂佞の事を防ぐを主る。七公七星は招搖の東に在り、貫索に接近す。貫索は天獄為り。刑獄失中すれば、則ち七公評議し、其の冤枉を理む。庫楼十星は大角の南に在り。騎官二十七星は氐の南に在り。騎官は乗るを典り、故に「騰驤」と曰ふなり。天市二十四星は房心の北に在り、帝座一星は天市の中心に在り。

○於前則老人天社、清廟所居。明堂配帝、靈臺考符。丈人極陽而慌忽、子孫嘒嘒於參嵎。天狗接狼以吠守、野鷄伺晨於參墟。

前に於けるや則ち老人 天社、清廟の居る所なり。明堂 帝を配し、霊台 符を考ふ。丈人 陽を極めて慌忽とし、子 孫 参嵎に嘒嘒たり。天狗 狼に接して以て吠守し、野鷄 晨を参墟に伺ふ。

【通釈】南側には「老人」や「天社」があり、ここは「清廟」も位置する場所である。「明堂」には天帝を祀り、「霊台」では天からの瑞祥を考察する。「丈人」は南方に位置してほんの微かしか見えず、その東に見える「子」や「孫」はこちらも極小の光で「参」の端に佇むばかりである。「天狗」は「狼」の北側に接して「天市」の警備を行い、「野鷄」は夜明けを「参」の付近で知らせてくれている。

【張淵自注】老人一星は弧の南に在り、常に春秋を以て之を分候す。天社六星も亦た弧の南に在り。清廟十四星は張の南に在り。明堂三星は太微の西南の角外に在り、霊台三星は明堂の西に在り。丈人二星は軍市の西南に在り。星 南方に在り、故に「極陽」と称す。慌忽、星の細小にして、遠邈として見難きを謂ふ。『老子』(1)に曰く、「忽たり慌たり、其の中に象有り。慌たり忽たり、其の中に物有り」と。子二星は丈人の東に在り。嘒、小さき貌なり。孫二星は子の東に在り。『詩』(2)に云ふ、「嘒たる彼の小星、三五 東に在り」と。此れ之を謂ふか。天狗七星は狼の北に在り、野鷄一星

は参の東南に在り。天市中街は警怖を主る、故に「吠守」と曰ふ。鶏能く時を候ぐ、故に「伺晨」と曰ふ。

【補注】（1）『老子』第二十一章に「惚兮恍兮、其中有象。恍兮惚兮、其中有物」とある。
（2）『毛詩』召南「小星」に「嘒彼小星、三五在東」とある。

○右則少微軒轅、皇后之位、嬪御相次、尊卑有秩。御宮典儀、女史執筆。内平秉禮以伺邪、天牢禁愆而察失。

右は則ち少微 軒轅、皇后の位あり、嬪御 相ひ次び、尊卑に秩有り。御宮 儀を典り、女史 筆を執る。内平 礼を秉りて以て邪を伺ひ、天牢 愆を禁じて失を察る。

【通釈】西側には「少微」や「軒轅」が並び、ここには皇后の位が配されており、嬪御の位とも併せて席次があり、尊卑の別にも秩序が存在している。「御宮」は礼儀作法を掌り、「女史」は記録のために筆を執っている。「内平」は礼を心中に懐き邪媚を正し、「天牢」は過失を観察してその過ちを禁じている。

【張淵自注】少微四星は太微の西南に在り、北のかた白衣処士の位に列す。軒轅十七星は七星の北に在り、皇后嬪御の位有り。尊卑相ひ次ぎて、皆な之を秩序とするなり。御宮四星は鈎陳の左傍に在り、此の星は典司の礼儀、威容歩趨の事を主る。女史一星は柱下史の北に在り。女史は昼夜昏明、節漏省時を記識し、勾陳の右傍に在り。内平四星は中宮の南に在り、邪媚の事有らば、礼を以て之を正す。天牢六星は北斗の魁の下に在り、過失有らば則ち其の愆ちを懲らすなり。

○於後則有車府傳舍、匏瓜天津。扶匡照曜、麗珠珮珍。人星麗玄以閑逸、哭泣連屬而趨墳。河鼓震雷以磕磕、騰蛇蟠縈而輪菌。

後ろに於けるや則ち車府 伝舍、匏瓜 天津有り。扶匡 照曜し、麗珠 珮珍す。人星 玄に麗きて以て閑逸とし、哭泣 属を連ねて墳へ趨く。河鼓 震雷して以て磕磕とし、騰蛇 蟠縈して輪菌たり。

【通釈】北側には「車府」「伝舍」や、「匏瓜」「天津」の星々が並んでいる。「扶匡」はその耀きを地上に照射し、「麗珠」は珍らかな装飾を珮びている。「人星」は上天に静かで安らかに位置し、「哭」や「泣」は互いに連続して「墳」へと進んでいく。「河鼓」は鳴りはためく雷のごとくがらごろと音を立て、「騰蛇」はその場にわだかまりぐねぐねと絡まり合うように座している。

【張淵自注】車府七星は天津の東に在り、伝舎五星は華蓋の上に在り、匏瓜五星は麗珠の北に在り、天津九星は匏瓜の北に在り。扶匡七星は天津の東に在り、麗珠五星は須女の北に在り。麗桂・衣珠・珮珍、后夫人の盛飾なり。其の星 皇后の服を主るなり。人星五星は車府の南に在り。麗は附くなり。玄は天なり。人星の閑逸に近きを言ふ。『易』(1)に曰く、「日月星辰は天に麗く」と。『石氏経』(2)に曰く、「人星 優游して、人乃ち安寧す」と。哭二星は虚の南に在り、泣三星は哭の東に在り。墳墓四星は危の南に在り。哭・泣星は行列して墳墓に趣向す、故に「連属」と曰ふ。河鼓十二星は南斗の北に在り、此の星 昏中南方にて震雷す。『易』(3)に曰く、「之を鼓するに雷霆を以てす」と。此れ之の謂ひなり。此の星 声音を主る、故に「磕磕」と曰ふ。騰蛇二十二星は営室の北に在り、形状は蛇に似たり、故に「輪菌」と曰ふ。

【補注】(1)『周易』離卦彖伝に「日月麗乎天、百穀草木乎土」とある。なお、『論衡』に自注と同じ内容が「『易』曰」として引用される。(2)春秋戦国の石申による『石氏星経』を指す。『漢書』天文志などに引用がある。(3)『周易』繫辞上伝に「鼓之以雷霆、潤之以風雨、日月運行、一寒一暑」とある。

○於是周章高眄、環旋辰極。既覿鈎陳中禁、復覩天帝休息。漸臺可昇、離宮可卽。酒旗建醇醪之旌、女牀列窈窕之色。輦道屈曲以微煥、附路立于雲閣之側。

是に於いて周章 高眄として、辰極を環り旋る。既に鈎陳を中禁に覿て、復た天帝の休息せるを覩る。漸台は昇るべく、離宮は即くべし。酒旗 醇醪の旌を建て、女牀 窈窕の色を列ぬ。輦道は屈曲して以て微かに煥き、附路は雲閣の側に立つ。

【通釈】ここで改めて視界を巡らせていけば、「北極」がめぐり戻ってきた。すでに「鈎陳」を紫微宮の中に収めれば、ここにまた天帝の休息する様子を目にすることができる。天帝は「漸台」へと登って外界を観察し、「離宮」へと赴き遊行する。「酒旗」は牙旗を建てて燕飲を掌り、「女牀」は天帝の左右に奥ゆかしく控えている。「輦道」は曲がりくねってしかも耀きは仄かであり、「附路」は天帝のために雲閣の側に設けられている。

【張淵自注】辰極は北極なり。鈎陳六星は紫宮の中に在り、天皇大帝の居る所なり。諸宮別館及び天牀星、皆な是れ休息寝臥して游ぶなり。漸台・離宮は皆な天宮の台の名なり。漸台四星は織女の東の足下に在り。離宮六星は営室と相ひ連なる。言ふこころは天帝或ひは漸台に升りて観、或ひは離宮に就きて游ぶなり。即は就くなり。『礼記』(1)に曰く、「宮を宗周に即く」となり。酒旗三星は軒轅の左角に在り、天 酒官を設置し飲燕の事を為す、故に牙旗を建てて標と為す。女牀三星は紀星の東北端に在り、天王の女に奉侍す。天王に侍衛し、必ず「関雎」の窈窕の美有り、妬忌の心無ければ、乃ち天王の左右に侍衛すべく、故に「列窈窕之色」と言ふなり。輦道五星は織女の西足

に在り、屈曲して細小なり、故に「微煥」と言ふなり。附路一星は閣道の傍に在り、天帝の出入は閣道の附路に由る。豫め敗傷を防ぐ、故に「立於雲閣之側」と言ふ。

【補注】（1）『礼記』祭統に「成公乃命莊叔隨難于漢陽、卽宮于宗周、奔走無射」とある。

○其列星之表、五車之間、乃有咸池鴻沼、玉井天淵。建樹百果、竹林在焉。江河炳著於上穹、素氣霏霏其帶天。神龜曜甲於清泠、龍魚摛光以暎連。

其れ列星の表、五車の間、乃ち咸池 鴻沼、玉井 天淵有り。建樹 百果、竹林 焉に在り。江河 炳として上穹に著れ、素気 霏霏として其れ天を帶る。神亀 甲を曜かして清泠として、龍魚 光を摛めて以て暎連たり。

【通釈】ところで列宿の外側や、「五車」の間には、「咸池」や「鴻館」、「玉井」や「天淵」を目にすることができる。或いは「建樹」や「百果」、「竹林」といった星々もここに認めることができる。「天江」が青みがかった光で天穹にあらわれ、真白い気がもくもくと上天にかかっている。神のごとき「亀」はその天河の中に甲羅を耀かすこと清らかに透き通るかのようであり、龍宿に属す「魚」も天河の中で鱗のきらめきで水面を耀かせている。

【張淵自注】列宿の外 之を表と謂ふ。咸池三星は天潢の東に在り、鴻沼二十三星は須女の北に在り、玉井四星は参の左の足下に在り、天淵十星は亀星の東南に在り、建樹・百果星は胃の南に在り、竹林二十五星は園の西南に在り。江は天江星なり。天江四星は尾の北に在り、天江星乃ち炳然として天上に著見するを言ふ。素気なる者、天河の白気なり。素は白なり。霏霏然、天に帶著するなり。神亀、亀星なり。五星有りて尾の南に在り。亀 来事を知る、故に「神」と称す。河中に在り、故に「清泠」と謂ふ。魚龍、魚一星を謂ひ、尾の後ろの河中に在り。尾は龍宿為り、故に「龍魚」と言ふ。此の星 河中に在り、魚星の映なるを以て、水に光曜有るなり。

○又有南門鼓吹、器府之官。奏彼絲竹、爲帝娛歡。熊羆綿絡於天際、虎豹儵煜而暉爛。弧精引弓以持滿、狼星搖動於霄端。

又た南門 鼓吹、器府の官有り。彼の絲竹を奏で、帝の為に娛歡す。熊 羆 天際に綿絡とし、虎 豹 儵煜として暉爛たり。弧精 弓を引きて以て満を持し、狼星 霄端に揺動す。

【通釈】そうかと思えば「南門」や「鼓吹」の星があり、「器府」の官職も置かれている。ここでは糸竹管弦を奏でることで、天帝に娛楽を提供するのである。「熊」や「羆」は天の果てで連綿と続いているし、「虎」や「豹」は青白く爛熟した光を放っている。「弧」

の精は弓を引き絞り今かと待ち構えているし、「狼」は天の端を揺り動かしている。

【張淵自注】南門･鼓吹二星は庫楼の南、翼の西南に在り。器府三十二星は軫の南に在り。器府は絲竹の事を典掌し、以て天帝を娯楽するなり。虎・豹・熊・羆四星は狼星の傍らに在り。狼一星は参の東南に在り、弧九星は狼の東南に在り。『星伝』(1)に云ふ、「天下に兵起これば、則ち弧弓 天に張る」と。

【補注】(1)『星伝』は、前掲『石氏経』と同じ天文書の一つ。『漢書』や『宋書』などの天文志で引用される。

○其外則有燕秦齊趙、列國之名。雷電霹靂、雨落雲征。陳車策駕於氐南、天駟騁步於太清。園苑周回以曲列、倉廩區別而殊形。

其れ外は則ち燕 秦 斉 趙、列国の名有り。雷電 霹靂ありて、雨 落ち雲 征く。陳車は駕を氐南に策ち、天駟は歩を太清に騁す。園 苑は周回して以て列を曲げ、倉 廩 は区別して形を殊にす。

【通釈】その外側には「燕」「秦」「斉」や「趙」といった、列国の名を冠した星々が並んでいる。「雷電」や「霹靂」の星があり、その南側を「雨」が落ち「雲」がたなびいていく。「陳車」は「氐」の南側で車馬に鞭打っており、「天駟」とも称される「房」は歩みを天道に沿って進めている。「天園」と「天苑」はぐるぐると回って迂りながら並んでいるし、「天倉」や「天廩」は区別されてその形を別にしている。

【張淵自注】外は列宿の外を謂ひ、復た諸国の名有り。斉一星は九坎の東に在り、趙二星は斉の北に在り、鄭一星は趙の北に在り、越一星は鄭の北に在り、周二星は越の東に在り、秦二星は周の東に在り、代二星は秦の南に在り、晋一星は代の南に在り、韓一星は晋の西に在り、魏一星は韓の北に在り、楚一星は韓の西に在り、燕一星は楚の南に在り。諸列国の名、凡そ十二星有るなり。征は行くなり。雷電六星は営室の南に在り、霹靂五星は上公の西南に在り、雲雨四星は霹靂の南に在り。陳車三星は氐の南に在り。房星は一名天駟なり。天園十四星は苑の南に在り、天苑十六星は昴畢の南に在り、天倉六星は婁の南に在り、天廩四星は昴の南に在り。形象の殊別にして同じからざるを言ふなり。

○内則尚書大理、太一天一之宮。柱下著術、傳示無窮。六甲候大帝之所須、内厨進御膳於皇躬。天船横漢以普濟、積水候災于其中。陰德播洪施以恤不足、四輔翼皇極而闡玄風。

内は則ち尚書 大理、太一 天一の宮あり。柱下 術を著し、伝へ示すこと窮り無し。六

甲は大帝の須ふる所を候ひ、内厨は御膳を皇躬に進む。天船は漢に横たはりて以て普済し、積水は災を其の中に候ふ。陰徳は洪施を播きて以て足らざるを恤ひ、四輔は皇極を翼けて玄風を闡かにす。

【通釈】紫微宮の内側には「尚書」や「大理」といった役所、そして「太一」や「天一」といった宮殿がある。「柱下史」は著述を事として、これが伝え示すものには窮極がない。「六甲」は天帝が使用するものについて伺いを立て、「内厨」はお食事を天帝の面前へと進呈する。「天船」は天漢に横たわるように並んですべてを救済し、「積水」は「天船」の中にあって災厄の様子を見定めている。「陰徳」は大いなる陽報をもたらすもまだ十分ではないことを残念に思い、「四輔」は天帝を補佐してその徳教を顕かなものとする。

【張淵自注】尚書五星は紫微宮門内の東南維に在り。大理二星は紫微宮中に在り。太一・天一各の一星は相ひ近く、紫宮門の南に在り。柱下史一星は北極の東に在り。六甲は華蓋の下に在り、内厨二星は紫宮の西南の角外に在り。天船九星は大陵の北に在り、積水一星は天船の中に在り。陰徳二星は尚書の西に在り、四輔四星は北極を侠む。播は布くなり。洪は大なり。玄は天なり。陰徳の官は必ず陽報有り。夫れ陰施陽報は自然の常数なり。貧窮困死は、生民の極艱なり。以て困乏□（空格）死に至りて、陰徳の終ゆるに遭ふ。故に窮する者は周恤を希まずして恵みは与に自から至り、施す者は報を求むる無くも酬答自から来たり。斯れ乃ち冥中の理なれば、大象豈に其の曜きを虚しく構へんや。四輔星は既に北極の枢を翼佐し、又た能く天帝の風教を闡揚す、故に「闡玄風」と言ふなり。

○恢恢太虚、寥寥帝庭、五座並設、爰集神霊。乃命熒惑、伺彼驕盈。執法刺舉於南端、五侯議疑於水衡。金火時出以成緯、七宿匡衛而爲經。暐曄昱其並曜、粲若三春之榮。覩夫天官之羅布、故作則於華京。

恢恢たる太虚、寥寥たる帝庭、五座 並び設け、爰に神霊を集む。乃ち熒惑に命じて、彼の驕盈を伺ふ。執法は南端に刺挙し、五侯は水衡に議疑す。金火は時に出でて以て緯を成し、七宿 匡衛して経と為る。暐曄 昱として其れ並び曜き、粲として三春の栄の若し。夫の天官の羅布を覩て、故に則を華京に作れり。

【通釈】広大な太微宮、そして清虚たるその前庭、ここには五帝の座が並んで設けられ、この地に多くの神々を一同に会させる。そこで「熒惑」に命じて、心驕り無道を行う国々を監視させる。「執法」は太微宮の南端で悪行を謗り功績を挙げるし、「五侯」は「水衡」の位置で疑獄への評議を行うのである。「熒惑」や「太白」は時々に姿をあらわして天上の横糸となり、「二十八宿」は天帝を護衛することで天上の縦糸となるのである。その輝きは明らかで並んで光をきらめかせており、その華やかさはまるで春日に花々が咲

き誇るかのようである。あの天上に敷きつめられる紗のごとき官職を目にして、こうして王者は法を地上の栄えある都に創出したのである。

【張淵自注】恢恢・寥寥は皆な広大清虚の貌なり。『老子』(1)に曰く、「天網恢恢、疏にして失はず」と。帝は太微宮を謂ふなり。五座は太微宮中の五帝の座を謂ふなり。黄帝霊威仰(2)は東方に位し、赤帝赤熛怒は南方に位し、白帝白招矩は西方に位し、黒帝汁光紀は北方に位し、黄帝含枢紐は中央に位す。五帝各の異なり、並びに諸神の官を集め、之と与に国事を謀る。『孝経援神契』(3)に曰く、「並びに神霊の集ひ謀るを設く」と。此れ之の謂ひなり。熒惑は常に十月・十一月を以て太微に入り、制を受けて無道の国を伺う、故に「伺彼驕盈」と曰ふなり。太微の南門、之を「執法」と謂ふ。刺挙なるは、姦悪を刺り、功有るを挙ぐ。五候五星は東北に在り。東井は水衡為り、疑獄を弁じ、五候議して之を評するなり。金・火は熒惑・太白なり。七宿は一方の七宿を謂ふ。天文は謂へらく五星を緯と為し、二十八宿を経と為す、故に金火七宿を挙げて言と為せば、則ち五星二十八宿知るべきなり。言ふこころは五星の出入す、伏して有時を見るに、常には出でざるなり。言ふこころは星辰の布曜すること、春日の栄華の若きなり。言ふこころは天官の羅は上に布き、王者の法は下に效す。『論語』(4)に曰く、「惟だ天を大なりと為し、惟だ堯のみ之に則る」となり。

【補注】(1)『老子』第七十三章に「天網恢恢、疏而不失」とある。(2)「黄帝」は「青帝」の誤り。(3)『孝経援神契』は『孝経』に対する緯書の一つ。『隋書』経籍志に「孝經援神契七巻、宋均注」と見える。(4)『論語』泰伯に「子曰、大哉、堯之爲君也。巍巍乎。唯天爲大、唯堯則之」とある。

○及其災異之興、出無常所。歸邪繽紛、飛流電舉。妖星起則殃及晉平、蛇乗龍則禍連周楚。或取證於逢公、或推變於衝午。乃有欽明光被、塡逆水府、洪波滔天、功隆大禹。此則冥數之大運、非治綱之失緒。

其れ災異の興れるに及びては、出づるに常なる所無し。帰邪 繽紛とし、飛 流れ電 挙ぐ。妖星起これば則ち殃ひ晋平に及び、蛇 龍に乗ずれば則ち禍ひ周楚に連なる。或ひは証を逢公に取り、或ひは変を衝午に推す。乃ち欽明 光被なるも、塡の水府に逆にし、洪波 天に滔るるも、功は大禹に隆なる有り。此れ則ち冥数の大運にして、治綱の失緒に非ず。

【通釈】その災異が発生することについては、常にあらわれる場所があるわけではない。雲や星のようでそうではない瑞気が漂い、飛星がぱっと輝きを見せて流星が尾を曳きながら空に挙がることがある。妖星があらわれると晋の平公に災いが及び、歳星が迷走すれば禍いが周王や楚子に連続するという見方があった。これは証拠に逢公の死を前例と

して取り上げ、変化を虚宿が周と楚の分にあたる「午」に対面したことより推し測ったものである。また堯が心身を慎み道理を明らかにし、広く徳教を行き渡らせたが、土星が「水府」へ逆行することがあり、大波が天にも届かんほどに溢れても、結局は功績が禹に盛んにもたらされることもあるのである。これは人智では知り得ない暦数に基づく天命であって、君主の治政や法律が順序を失ったことによるものではない。

【張淵自注】言ふこころは災異の出づるに常宿無く、其の善悪に随ひて之に処る。假使鄭国に事有らば、則ち変は角亢に見はるなり。星の如くして星に非ず、雲の如くして雲に非ず、之を「帰邪」と謂ふ。夾むに微気を以てす、故に「繽紛」と称す。飛は飛星なり。流は流星なり。飛星と流星と各の異なり、飛星は焱去して迹絶え、流星は迹存して滅せず。電挙なる者は、焱に似て電長し。『春秋』(1)魯の襄公十年春正月戊子、妖星 婺女に出で、申維に見はる。婺女は斉に属し、申は晋の分為り。梓慎 妖星の出づるを見て、晋侯の戊子日を以て死するを知る。蛇の龍に乗ずるは、襄公二十八年(2)、歳星の天津に次び、玄枵十五度に於いて、虚の下に在るを謂ふ。歳星は木を主り、位は東に在り、体は房心に合し、故に龍と名づく。虚は坎に在り、坎の子位、玄枵に次び、亀蛇の類なり。歳星 次を失ひ、虚の外に行き、其の下に出づ、故に「蛇乗龍」と曰ふ。龍は寿星に位し、宋鄭の分たり。梓慎 蛇の龍に乗ずるを見、飢の宋鄭に在るを知る。然るに裨竈以為へらく周王及び楚子皆な死すと。二人の変を推すこと同じからざるは、見る所の各の異なればなり。梓慎・裨竈は古の良史なり。逢公は斉邑にあり、姜の先なり。言ふこころは逢公の死せる時、亦た此の星の見はるる有り、梓慎は星を推すに、此を以て之に方へ、晋の平公の将に死せんとするを知る。衝午、虚宿の午に対するを謂ふ。午は張翼為り、張翼は周楚の分なれば、裨竈占ひて周王・楚子の死せるを知る、故に「推変於衝午」と曰ふ。昔堯 洪水に遭ひ、塡星逆行して水府に入る。『書』(3)に曰く、「欽明文思、光被万邦」と。言ふこころは洪水既に出で、堯 鯀に命じて之を治めしむるも功成らず、乃ち復た禹に命じて治めしむれば之を平らぐ、禹は済世の難、治水の功有り。『書』(4)に曰く、「洪水 天に滔る」と。又た(5)曰く、「禹は玄圭を錫へ、厥の成功を告ぐ」と。言ふこころは先づ洪水に遭ひ、塡星の逆行の異を致すは、不徳の致す所に非ずして、此れ乃ち運数の爾応ずるなり。

【補注】(1)『春秋左氏伝』昭公十年の伝に「十年、春、王正月。有星出于婺女。鄭裨竈言於子産曰、七月戊子、晉君將死」とある。(2)『春秋左氏伝』襄公二十八年の伝に「二十八年、春、無冰。梓愼曰、今茲宋鄭其饑乎。歳在星紀。而淫於玄枵。以有時菑。陰不堪陽。蛇乗龍。龍宋鄭之星也。宋鄭必饑。玄枵虚中也。枵、耗名也。土虚而民耗、不饑何爲」とある。(3)『尚書』堯典に「放勳欽明、文思安安、允恭克讓。光被四表、格于上下。克明俊琢、以親九族。九族既睦、平章百姓。百姓昭明、協和萬邦。黎民於變時雍」とある。(4)『尚書』皋禹謨に「禹曰、洪水滔天、浩浩懐山襄陵、下民昏墊」とある。(5)『尚書』禹貢に「東漸于海、西被于流沙、朔南暨、聲教訖于四海。禹錫玄圭、告厥成功」とある。

○蓋象外之妙、不可以粗理尋。重玄之内、難以熒燎覩。至於精靈所感、迅踰駭嚮。荊軻慕丹、則白虹貫日而不徹。衛生畫策、則太白食昴而摛朗。魯陽指麾、而曜靈爲之回駕。嚴陵來游、而客氣著於乾象。斯皆至感動於神祇、誠應效於既往。

蓋し象外の妙なること、粗理を以て尋ぬるべからず。重玄の内、熒燎を以て覩難し。精霊の感ずる所に至りては、迅かに駭嚮を踰ゆ。荊軻 丹を慕へば、則ち白虹 日を貫くも徹せず。衛生 画策すれば、則ち太白 昴を食らひて摛朗たり。魯陽 麾を指して、曜霊 之が為に駕を回す。厳陵 来たり游びて、客気 乾象に著る。斯れ皆な神祇を感動せしめ、誠に効を既往に応ぜしむるに至るものなり。

【通釈】そもそも観象の外にある微妙なものは、中途半端な理解ではたどり着くことはできないし、極めて奥深い内側にあるものは、仄かな灯りでは見ることが難しいのである。そして精霊が感じたものであれば、これらを直ちに飛び越えて驚きの結果へと向かうのである。昔に荊軻が燕の太子丹の義に感じ入り、白虹が太陽を貫いたけれども秦始皇の暗殺は果たせなかった。衛先生は秦のために策を練ったものの、太白が昴を呑み込んではその光をちりばめた。古の賢人である魯陽は手ずから指しまねいたならば、太陽はそのために車駕を戻したのである。また厳陵が光武帝のもとを来訪したならば、客星の精が天象にあらわれたのである。これらはすべて天地の神々を大いに感動させ、実に徴候を過ぎ去った事例に応じさせたものなのである。

【張淵自注】言ふこころは玄理は微妙にして、知見すべからざるなり。昔荊軻 燕太子丹の義を慕ひて、秦に入りて刺客と為る、至精は上を感ぜしむると雖も事竟に捷げず。昔衛先生 秦の為に長平に画策せしも、昭王疑ひて信じず、太白の昴を食らふの変有り。魯陽は古の賢人にして、手をもって日を麾けば、能く再び回るなり。昔光武の白衣為りし時、厳陵と相ひ厚善す。帝位に登るに及びて、陵来たりて入見するも、太史奏して曰く、客星の帝座を犯せりと。光武詔して曰く、乃ち厳子陵にして、客に非ずと。

○爾乃四氣鱗次、斗建辰移。雖無聲言、三光是知。星中定於昏明、影度以之不差。測水旱於未然、占方來之安危。陰精乘箕、則大飆暮鼓。西南入畢、則淫雨滂沱。譬猶晉鍾之應銅山、風雲之從班螭。

爾して乃ち四気 鱗次し、斗建 辰移す。声言無しと雖も、三光 是れ知る。星中は昏明に定まり、影度は之を以て差はず。水旱を未然に測り、方来の安危を占ふ。陰精 箕に乗ずれば、則ち大飆 暮に鼓す。西南のかた畢に入れば、則ち淫雨 滂沱たり。譬ふるに猶ほ晉鍾の銅山に応じ、風雲の班螭に従ふがごとし。

【通釈】さて四時の季節が鱗のごとく続き、斗柄が左に旋回して辰が移り変わっていく。天上は声音を発することはないけれども、日月星は声無き声を理解するのである。星々

の位置は暮れ方と明け方に定まり、その影の長さはこれによって差が生じるのではない。雨季と乾季を前もって測定し、将来の安全と危険とを占うのである。月が箕の位置へと入り込めば、つむじ風が巻き起こり暮れの太鼓が鳴らされる。また月が西南の方角の畢の位置に入り込めば、三日以上大雨が降り続くことになる。これは例えば晋の鍾が蜀山が崩落するのに応じて鳴り響くようなものであり、風や雲が龍や虎に従って動きを見せるようなものである。

【張淵自注】言ふこころは四時の代謝は常ならず、毎に月斗移りて一辰を建て、天は無声の言語あれば、止むるに星辰を以てし変譴を見はして以て人に示すなり。孟春正月、昏は参中、旦は尾中なり。仲春の月、昏は弧中、旦は建星中なり。季春の月、昏は七星中、旦は牽牛中なり。孟夏の月、昏は翼中、旦は婺女中なり。仲夏の月、昏は亢中、旦は危中なり。季夏の月、昏は心中、旦は奎中なり。孟秋の月、昏は建星中、旦は畢中なり。仲秋の月、昏は牽牛中、旦は觜觿中なり。季秋の月、昏は虚中、旦は柳中なり。孟冬の月、昏は危中、旦は七星中なり。仲冬の月、昏は東壁中、旦は軫中なり。季冬の月、昏は婁中、旦は氐中なり。冬至の日、八尺の標を建つれば、影の長さは一丈三尺五寸なり。夏至の日、影の長さは一尺六寸なり。影の長ければ水為り、影の短ければ旱為るなり。陰精は月なり。東北のかた道を失ひ箕に入れば、則ち風多し。移りて西南のかた、道を失ひて畢に入れば、則ち雨多し。雨三日にして淫雨為り。『詩』(1)に云ふ、「月 畢に麗りて、俾して滂沱す」と。『書』(2)に曰く、「星に風を好む有り、星に雨を好む有り」と。此れ之の謂ひなり。言ふこころは雲は龍に従ひ、風は虎に従ひ、気を同じくして相ひ求め、類を同じくして相ひ応ずること、蜀山崩れて晋鍾鳴るがごときなり。

【補注】(1)『毛詩』小雅「漸漸之石」に「月離于畢、俾滂沱矣」とある。なお、王先謙『詩三家義集疏』によれば『魯詩』は「離」を「麗」に作る。(2)『尚書』洪範に「庶民惟星、星有好風、星有好雨」とある。

○若夫冥車潛駕、時乘六虬、大儀回運、萬象俱流。北斗俄其西傾、羣星忽以匿幽。望舒縱轡以騁度、靈輪浹且而過周。

若し夫れ冥車 潛駕し、時に六虬に乗ずるは、大儀 回運し、万象 俱に流る。北斗 俄かに其れ西に傾き、群星 忽ち以て幽に匿る。望舒 轡を縱にして以て度を騁し、靈輪 浹且に周を過ぐ。

【通釈】真暗な車駕が潜かに奔りまわり、時に六匹の龍に乗じたならば、万物の根源がめぐり、ありとあらゆるものが流れを見せるようになる。北斗星は突然西の方角に傾き、沢山の星々が忽然と姿を暗闇の中に隠すのである。月は轡を気の向くままに操り度を進

み、太陽は明け方になって一周を果たすのである。

【張淵自注】六虬は六龍なり。『易』(1)に曰く、「時に六龍に乗りて、以て天を御す」と。此れ皆な是れ天回運転なり。幽は暗なり。望舒は月なり。月、日に十三度十九分度の七を行き、周天は凡そ三百六十五度四分度の一なり。天一日一夜運転して周一度を過ぐ。浹は匝なり。旦暁に至りて匝を過ぐ、故に「浹旦而過周」と曰ふなり。

【補注】(1)『周易』乾卦彖伝に「時乗六龍、以御天」とある。

○爾乃凝神遠矚、曬目八荒、察之無象、視之眇茫。狀若渾元之未判別、又似浮海而覩滄浪。幽遐迥以希夷、寸眸焉能究其傍。

爾して乃ち神を凝らして遠矚し、目を八荒に曬け、之を察るに無象として、之を視るに眇茫たり。狀は渾元の未だ判別せざるが若く、又た浮海の滄浪を覩るに似たり。幽遐 迥として以て希夷とし、寸眸もて焉ぞ能く其の傍を究めん。

【通釈】さて精神を集中させて遠くを眺めわたし、視界を八方の彼方まで及ぼすも、これを観察するのに星々の姿はなく、これを視界に捉えても曖昧模糊としている。姿かたちは自然の気がまだ判別できないようなものであり、大海原に浮かんで青々とした水を眺めるようなものなのである。遥か遠くの彼方に奥深い道理があるのであるが、自らの眼ではどうしても一部分しか極めることができない。

【張淵自注】凝神は精の動かざるなり。言ふこころは遠く傍視を極め、茫然として造化の始まり、元気未だ分かれざるが若くして、浮海に遠望して其れ辺りを見ざるに似たり。『論語』(1)に曰く、「桴に乗りて海に浮かぶ」と。『老子』(2)に曰く、「之を聴きて其の声を聞かず、名づけて希と曰ふ。之を視て其の形を見ず、名づけて夷と曰ふ」と。

【補注】(1)『論語』公冶長に「子曰、道不行、乗桴浮于海。從我者、其由與」とある。(2)『老子』第十四章に「視之不見、名曰夷。聽之不聞、名曰希」とある。

○於是乎夜對山水、栖心高鏡。遠尋終古、攸然獨詠。美景星之繼晝、大唐堯之德盛。嘉黃星之靡鋒、明虞舜之不競。疇呂尚之宵夢、善登輔而翼聖。欽管仲之察微、見虛危而知命。歎熒惑之舍心、高宋景之守政。壯漢祖之入秦、奇五緯之聚映。

是に於いてか夜 山水に対し、心を高鏡に栖ましむ。遠く終古を尋ね、攸然として独り詠ず。景星の昼に継げるを美し、唐堯の徳盛なるを大いにす。黄星の鋒靡きを嘉し、虞舜の競はざるを明とす。呂尚の宵夢を疇とし、善く輔に登りて聖を翼く。管仲の微

を察るを欽とし、虚危を見て命を知る。熒惑の心を舍くを歎じ、宋景の政を守るを高しとす。漢祖の秦に入るを壮んなるとし、五緯の聚映するを奇とす。

【通釈】ここで夜半に相対し、気持ちを高く澄んだ鏡に留めることにする。遠く古代へと思いを馳せ、ゆったりとした心持ちで孤独に吟詠してみる。大きな瑞星が昼間に姿を見せるのを吉兆とし、堯の徳が盛んであることを大いに称揚する。また黄色に輝くめでたき星に角が見えないことを瑞兆とし、舜が争うことなく禅譲を受けることを明らかにした。そして太公望呂尚が夜中に夢見たことを判断し、結果としてよく出仕して周の文王を補佐した。管仲の微妙な変化を察知する能力を敬い、虚や危の分に三星が集まるのを見て天命を理解した。熒惑の心を守ることを放棄したことを歎じて、却って宋の景王が政治を堅守したことを高く評価した。高祖劉邦が秦へと入ったことを勇壮だとし、五星が秦の分である東井に集まったことを奇異なこととしたのである。

【張淵自注】『瑞応図』（1）に曰く、「景星は大なること半月の如く、晦朔に生じ、月の光明を助く」と。堯の時に当たりて、此の星の見はるる有り、故に堯の徳を美し能く之を致すなり。昔舜の将に禅を堯より受けんとするに、先づ星の見はるる有り、円にして鋒芒無し。言ふこころは舜の当に土徳を用て天下に王たるべし。星見はれて芒角無き者は、揖譲を示して受け、兵事を以て争競せざるなり。昔太公未だ文王に遇はざりし時、魚を磻溪に釣り、夜夢に北斗輔星神の尚に告ぐるに伐紂の意を以てするを得たり。事は『尚書中候』篇（2）に見ゆるなり。昔管仲と鮑叔牙と南陽に商賈し、三星の虚危の分に聚ふを見て、斉に将に覇主有らんとするを知り、遂に共に力を戮くして、来たりて斉の地に投ずるなり。春秋の時に当たりて、熒惑 心を守るも、景公 史韋の言に従はざれば、熒惑 退舍して、二十年を延ぶ。昔漢祖 秦に入るに、五星 東井に聚ふは、秦の分なり。

【補注】（1）『瑞応図』は、『隋書』経籍志に「瑞應圖三卷。瑞圖讚二卷、梁有孫柔之瑞應圖記、孫氏瑞應圖贊各三卷、亡」と見える。（2）『尚書中候』は『尚書』に対する緯書の一つ。『隋書』経籍志に「尚書中候五卷、鄭玄注。梁有八卷、今殘缺」と見える。

○爾乃歴象既周、相佯巖際。尋圖籍之所記、著星變乎書契。覽前代之將淪、咸譴告於昏世。桀斬諫以星孛、紂酖荒而致彗。

爾して乃ち歴象 既に周りて、巖際に相佯す。図籍の記す所を尋ね、星変を書契に著す。前代の将に淪びんとするを覧て、咸な昏世を譴告す。桀は諫むるを斬りて以て孛を星とし、紂は荒むるに酖みて彗を致す。

【通釈】さて天象をすべて見終わり、岩肌のほとりでたちもとおる。文献が記したものを

尋ねては、星々の変化を文字として著していく。前代の王朝がまさしく滅びようとするのを目の当たりにし、みなが災異の徴候があることを咎め誡める。それは夏の桀が自らに諫言した関龍逄を斬ったことで孛星が姿を見せ、殷の紂王が荒淫に耽ることで彗星があらわれたようなものである。

【張淵自注】相佯は倘佯なり。『尚書』(1)に曰く、「日月星辰を暦象す」と。言ふこころは先代の君の将に淪亡せんとするに、天必ず災異の徴を告ぐなり。夫れ景星見はるれば則ち太平応じ、彗孛作れば禍乱興るは、天の常なり。昔 夏桀無道にして、関龍逄を斬りて悪を極むれば、孛星見はれ、湯 之を伐ち、鳴條の野に放つ。殷紂 炮烙の形を設くれば、彗星出で、武王 之に白旗を懸くなり。

【補注】(1)『尚書』堯典に「乃命羲和、欽若昊天、歴象日月星辰、敬授民時」とある。

○恒不見以周衰、枉蛇行而秦滅。諒人事之有由、豈妖災之虚設。誠庸主之難悛、故明君之所察。堯無爲猶觀象、而況德非乎先哲。

恒の見はれずして以て周 衰へ、枉の蛇行して秦 滅べり。諒に人事の由有るは、豈に妖災の虚しく設けるならん。誠に庸主の悛め難きは、故より明君の察る所なり。堯は無為なるも猶ほ観象す、而るに況んや徳の先哲に非ざるをや。

【通釈】恒星が出現しなかったがために周王朝は衰微してしまったし、枉矢が見えて蛇行したがために秦王朝も滅亡してしまった。実に人間での事象には理由が存在するのであり、どうして不可思議な災厄が虚しく発現することがあろうか。本当に凡庸な君主が我が身を改めるというのは困難であり、これは賢明な君主が自省するところである。帝堯は無為の君主であったけれども、それでもやはり観象することを怠るようなことはなかった。まして徳が先代の聖賢に及ばない君主たちにおいては、なおさら努めて観象を行わなくてはならないのである。

【張淵自注】昔 魯の荘公十年夏四月(1)、恒星見えず、是れ自り以後周室衰微す。枉矢出で、蛇行して尾無し、昔 項羽の関に入りし自り、此の変有り。『漢書』(2)に見ゆ。天の冥応を以て、玄象 変を為すを言ふ。要し人事に由らば、豈に妖災なるのみならん。言ふこころは庸君闇主、玄象譴告するも、行ひを改め自ら新たに以て天変に答ふる能はず。賢君明主は則ち然らず、天の災異を見れば、懼れて徳を修むるなり。夫れ唐堯の治に至る、猶ほ璇璣を歴象し、七政を闕く、況んや徳の古に及ばずして、而して之を観ざるをや。

【補注】(1)『春秋左氏伝』荘公七年の経に「七年、……夏、四月辛卯、夜恆星不見。夜

中星隕如雨」とある。（2）『漢書』天文志に「項羽救鉅鹿、枉矢西流。枉矢所觸、天下之所伐射、滅亡象也。物莫直於矢、今蛇行不能直而枉者、執矢者亦不正、以象項羽執政亂也。羽遂合從、阬秦人、屠咸陽。凡枉矢之流、以亂伐亂也」とある。

三、余説

本稿を通じて気付いた点を以下に述べる。最も重要であろうと思われる点は、張淵が彼以前に創作された歴代の辞賦作品を確かに読んでいたであろうことである。本稿に挙げた張淵の自注の内容からも明らかなように、彼は自らの注釈内で修辞に関する文献引用を殆ど行わず、また施すにしても簡単な字句説明を行うのみである。しかしながら、「観象賦」の中には歴代の辞賦作品に基づいたであろう修辞が散見されるのである。幾らか例を挙げれば、「騎官騰驤而奮足」の「騰驤」は、後漢の張衡「東京賦」に「六玄虬之弈弈、齊騰驤而沛艾」と見え、また「酒旗建醇醪之旌」の「醇醪」は、西晋の左思「魏都賦」に「不鬻邪而豫賈、著馴風之醇醪」と見えるがごとくである。ここでは敢えて『文選』所収作品に基づくものを挙げたが、これには理由がある。すなわち、本稿の通釈に基づけば、「観象賦」の第一段が歴代都邑賦の途上描写部分に範を取ったことは明らかであるが、これら都邑賦を張淵自身が実見できたと考えられるためである。筆者は「観象賦序」の「是時也、歳次析木之津、日在翼星之分」について、「歳星紀年法」及び『礼記』月令の記述に基づき、太延四年（438）秋七月に創作されたと考えるが、これは『文選』が編纂されるよりも前のことである。そこで先ほどの都邑賦に着目すれば、『隋書』経籍志に「二京賦」や「三都賦」の単独で流伝したものが「薛綜注張衡二京賦二巻」や「張載及晉侍注劉逵、晉懐令衞權注左思三都賦三巻」などとして確認できるのである。恐らく張淵はこれらを熟読した上で「観象賦」を創作したのではなかったか。ここからは北朝及び『文選』編纂以前における歴代辞賦作品の受容状況の実例を見ることができるのである。

以上は、あくまで本稿を通じた感想に近いものであり、充分な考察に基づくとは言い難いものである。今後は、「観象賦」の張淵自注そのものが持つ特質、先に示した創作時期を含めた「観象賦」創作の背景、そして「観象賦」に対する歴代辞賦作品の具体的影響などを考察したい。これらを通じて、北朝及び『文選』編纂以前の辞賦創作の実態を幾らか明らかにすることができると考えているが、本稿では紙幅の都合で論究することができなかった。稿を改めて論じることにしたい。

・本研究は JSPS 科研費 18K12309 の助成を受けたものです。

〈 論文 〉

現代の亡霊：“Karain” にみるコンラッドのマジックリアリズム的手法と幻想の探究

Modern Ghosts : Exploring Conrad's 'Magic Realism Method' and the Meaning of Illusion in "Karain"

今川　京子

[Abstract]

In Conrad's early short story "Karain," the word of 'illusion' has a double meaning, with Conrad making full use of various kinds of occult elements; witchcraft, magic tricks, and possession etc. Apparently, Karain, a Malay chief's obsession over the ghost of his friend Matara, symbolizes the significance of philosophy of enlightenment in colonial times. To escape from the ghost, Karain begs the gun-runners to take him with them to England which is the 'land of unbelief' where people 'live in unbelief' and 'understand all things seen' (59), which is an ironic echo. Karain's anguish over Matara's ghost reveals the power of illusion as substantiality, yet paradoxically, Karain's illusion emphasizes the image of Western society as a mirage. Jackson, who is one of the gun-runners, demonstrates it by comparing Western society with Karain's story, confessing: 'it is strong and alive; it would smash you if you didn't look out; but I'll be hanged if it is yet as real to me ... as the other thing ... say, Karain's story' (67). From that perspective, Karain assumes a role as a trickster in this story. In this paper, the occult elements in "Karain" are focused on as a means of exploring how Conrad depicts western society through the use of a modern ghost. Also, it is shown that Conrad uses a 'magic realism method' in order to clarify the content of paradoxical imagery and the meaning of ghosts in this modern world.

序論

コンラッドの小説には幻影や亡霊、魔物や怪物、といったモチーフや象徴的に登場する霧のイメジャリー、超自然的現象、オカルト的要素が溢れている。こういった異界や冥界に通じるイメジャリーを駆使することで、実在社会の構造や時代の動向、人間精神といった不可視なものを直接、本能や感覚に訴えかける形で読者に認識を迫るのがコンラッドの手法である。そのポリシーは *The Nigger of the 'Narcissus'* の 'Preface' (1897) の 'My task which I am trying to achieve is, by the power of the written word, to make you hear, to make you feel – it is, before all, to make you see' (p. x) や 'an impression conveyed through the senses' (p. ix) といった記述にも表れている。

現実世界で生きる人間が盲目的に信望する秩序や体系、規範といった理性の産物で唯一

無二と錯覚しがちな二項対立的価値基準や道徳観念を脅かし、その脆弱さを告発する媒介として、コンラッドが視せる幻は活躍する。例えば第一次世界大戦をテーマにした唯一の短編 “The Tale” では、同時代のリアルな緊迫感、不安、焦燥感といった心理を反映するかのように ‘fog’ ‘blind’ ‘shadow’ ‘ghostly’ ‘mist’ といった言葉が幾度も登場する。彼の創造する亡霊や幻は、単に想像力の産物であり、我々の現実世界とは無関係である、とは切り離せない。彼の亡霊のモデルは、常に同時代が内包していたリアルな問題や、普遍的に人間精神が胎胚する闇であったからである。例えば、実在の国家であるロシアを、コンラッドは‘Autocracy and War’（1905）のなかで‘the ghost’ ‘a ravenous ghoul’ ‘a blind Djinn’ ‘the Old Man of the Sea’ ‘phantom’ ‘the monster’ などに形容している。また同エッセイのなかで、20 世紀の時代的特徴をロシアの時代的特質と重ね合わせ、次のように述べる。

> It is even possible that we are destined for another sort of bliss altogether: that sort which consists in being perpetually duped by false appearances. But whatever political illusion the future may hold out to our fear or our admiration, there will be none, it is safe to say, which in the magnitude of anti-humanitarian effect will equal that phantom now driven out of the world by the thunder of thousands of guns; none that in its retreat will cling with an equally shameless sincerity to more unworthy supports, to the moral corruption and mental darkness of slavery, to the mere brute force of numbers.（1921: 91-92）

目に見えるもの、頭で理解でき言葉で説明が可能なものみに信を置く傾向にある近現代人の生とは、従って必然的にオートマチックな生である。しかしながらコンラッドが創造した幻影や亡霊、超自然的現象は、それが持つ普遍性やリアルさ故に、恐怖と慄きを呼び起こし、オートマチックな生からの覚醒を促す力を持つ。現実世界が被っているマスクを剥ぎ取り、その内奥を曝す力を有しているのである。「亡霊」や「幻」に託してコンラッドは人間の情念や想念、時代の襞や世界の死角に分け入り、近現代の合理的性や物質主義の限界に揺さぶりをかける。

最初の短編小説集 Tales of Unrest に収録された “Karain: A Memory”（1897）は一見すると、愛の幻影に憑りつかれたマレー人 Karain が親友を裏切り殺めた末に、友の亡霊から逃れようと苦悶する姿を追った小説である。“Karain” のなかでは、生霊や死霊は言うに及ばず、生的ダイナミズムの一形態としての愛すらも、一種の呪術めいた憑き物現象として描き出されている。不可視の声や幻、亡霊の囁きに怯える Karain の姿と、彼の言葉を借りれば「目に見えない声は軽蔑し、見えない物は信じない」「強い」白人たちの姿は一見すると、宗主国が植民地支配のプロパガンダとして掲げた「啓蒙」思想を想起させる。しかし、生と死の「充満の原理」の体現者らしい Karain の姿を描出することで、コンラッドは逆説的に西洋社会の感覚、つまり生と死を連続性のなかで捉えるのではなく、断片的なものとして捉える魂不在の西洋社会に迫っている。Karain が語るイリュージョンが反

転して可視化させる西洋社会そのものがミラージュ化され、そこに生きる西洋人の姿がいつしか亡霊的イメージへとシフトしていく。本稿では、コンラッドのマジックリアリズム的手法に着目し、彼が幻術や魔術、憑依現象といったオカルト的要素を駆使しつつ、人間存在の生と精神世界、魂そのものを一つの奇術として小説という舞台でどのように可視化しているのかを考察していく。

1. 幻影の受肉化（インカネーション）

物語の冒頭、主人公であるマレー人酋長の Karain は、過剰なまでの演技性を放つ人物として描かれる。彼の治める土地も、Karain の演技性を強調するかの如く 'stage' という比喩で表現される。

> It was the stage where, dressed splendidly for his part, he strutted, incomparably dignified, made important by the power he had to awaken an absurd expectation of something heroic going to take place – a burst of action or song – upon the vibrating tone of a wonderful sunshine. (31)

しかしながら、Karain の特徴ともいえるこの強烈な虚飾性の内に、語り手である銃密輸商人であるイギリス人の「私」は、説明しきれない不吉さを嗅ぎつけている。

> He was ornate and disturbing, for one could not imagine what depth of horrible void such an elaborate front could be worthy to hide. He was not masked – there was too much life in him and a mask is only a lifeless thing; but he presented himself essentially as an actor, as a human being aggressively disguised. His smallest acts were prepared and unexpected, his speeches grave, his sentences ominous like hints and complicated like arabesques. (31)

過剰なまでの生を彷彿させる人物として Karain は描写されているにも関わらず、先に引用した情景は、反対に Karain の空疎さや没個性を浮かび上がらせ、リアルな人間性を感じさせない人物として読者は彼を認識する。それは語り手の 'he accepted the profound homage with a sustained dignity seen nowhere else but behind the footlights and in the condensed falseness of some grossly tragic situation' という説明や '[i]t was almost impossible to remember who he was' といった形容からも明らかである (31)。また 'his quality was to appear clothed in the illusion of unavoidable success' という描写からも明らかなように、存在の重さ、実在性を感じさせない Karain とは言わば華美な幻影の如き存在である (32)。

彼が治める領土は、Karain の演技性を投影するかのように描写される。

> In many successive visits we came to know his stage well – the purple semicircle of hills, the slim trees leaning over houses, the yellow sands, the streaming green of ravines. All that had the crude and blended colouring, the appropriateness almost excessive, the suspicious immobility of a painted scene; and it enclosed so perfectly the accomplished acting of his amazing pretences that the rest of the world seemed shut out for ever from the gorgeous spectacle. There could be nothing outside. It was as if the earth had gone on spinning, and had left that crumb of its surface alone in space（32）.

'an adventurer of the sea, an outcast, a ruler' である Karain と同様、彼を取り巻く世界は幻影に満ちた空間として造形されている（33）。

> It was impalpable and vast. The earth had indeed rolled away from under his land, and he, with his handful of people, stood surrounded by a silent tumult as of contending shades. Certainly no sound came from outside. "Friends and enemies!" He might have added, "and memories," at least as far as he himself was concerned; but he neglected to make that point then（32）.

完全無欠なヒーローの如き演技者としての Karain と、彼が君臨する秩序と統制のとれた整合性のある社会共同体とその住民の生活ぶりは、しかしながら人間存在としての Karain を亡霊化している。

> His followers thromged round him; above his head the broad blades of their spears made a spiked halo of iron points, and they hedged him from humanity by the shimmer of silks, the gleam of weapons, the excited and respectful hum of eager voices（34）.

迸り躍動する生命力、慄き、感情や記憶、といった「個」としての人間らしさの片鱗すら感知するのが困難なほどに、Karain の昼間の世界は虚構的である。語り手の 'Day after day he appeared before us, incomparably faithful to the illusions of the stage, and at sunset the night descended upon him quickly, like a falling curtain' という指摘は、他者の視線を常に意識した立ち居振る舞い、過度に計算し尽くした理想の仮面を身につける者ならではの Karain の姿を彷彿させる（33）。また、'in his august care they had forgotten all the past, and had lost all concern for the future' といった描写からは、偶像化し崇拝的な対象として実在する、いわば人間としての肉体を有さない Karain のイメージが浮かび上がってくる（32）。

２. 仮面的生から原初的生へ

Karain の絢爛たる仮面的生が暴かれるのが、彼の秘められた恐怖を鎮める役を担っていた老人の死である（41）。この寡黙で謎めいた老人は ‘the old wizard, the man who could command ghosts and send evil spirits against enemies’ と描写される（38）。民からは ‘sorcerer’ または ‘sword-bearer’（57）と呼ばれ、「我々」白人の銃の密輸商からは ‘something inanimate, as a part of our friend’s trappings of state’ と見なされていた老人は、しかし Karain にとっては唯一彼が人間の顔を取り戻し存在できる対象、自らが創造した理想の世界の統治者という幻影を演じる必要のない存在者だったのである。完全無欠な英雄として、演者としての仮面をつけている偶像めいた Karain が、突如発作的に幻影や亡霊の気配を感じ、夢の支配下に呑み込まれていく瞬間は ‘he would throw himself back, and under the downward gaze of the old sorcerer take up, wide-eyed, the slender thread of his dream’ と描写されている（39）。Karain が演じる生は常に他者の目を過剰に意識した劇場型の生であり個としての自我意識を感じさせない虚ろさが逆説的に強調される。その一方、夢や幻影に溺れる瞬間は、個としての Karain の人間らしさが発現するのである。堅固な世界とその守護者としての生を演じる幻影の受肉化としての Karain と、過去の気配と呼び声に人間的弱さを取り戻し実存化する Karain 像を具象するのが、彼が冒頭で “All mine!” と自負する土地の描写である（30）。

> It was still, complete, unknown, and full of a life that went on stealthily with a troubling effect of solitude; of a life that seemed unaccountably empty of anything that would stir the thought, touch the heart, give a hint of the ominous sequence of days. It appeared to us a land without memories, regrets, and hopes; a land where nothing could survive the coming of the night, and where each sunrise, like a dazzling act of special creation, was disconnected from the eve and the morrow（30）.

老人の死と共に彼の ‘the power of his words and charms’ が失われ、Karain が抑圧してきた意識を暴走させ、超自然的現象、過去の亡霊からの逃亡者として「私」やその仲間の前に姿を現す（45）。彼が必死で逃げようとしているものの正体を知らない「私」は、そんな Karain の様子を ‘he had the power of the possessed – the power to awaken in the beholders wonder, pain, and a fearful near sense of things invisible, of things dark and mute, that surround the loneliness of mankind’ と描写する（44）。

> [B]ut his face showed another kind of fatigue, the tormented weariness, the anger and the fear of a struggle against a thought, an idea – against something that cannot be grappled, that never rests – a shadow, a nothing, unconquerable and immortal, that preys upon life（44）.

太陽の下で民と土地を統治する理想的な支配者でありながら、人間らしさを感じさせないKarain像からは想像もできないほどに、幻影に慄くKarainの姿は人間が抱える孤独を雄弁に物語る普遍的な力を放っている。苦悶するKarainは‘You men with white faces who despise the invisible voices’ ‘your unbelief and your strength’ ‘Oh! the strength of unbelievers!’と幾度も白人を称賛する（44）。

Karainはやがて身の上話を語りだす。親友Pata Mataraの妹がオランダ人男性と出奔したのを発端に、Mataraの復讐を手伝うために過酷な長旅を共にするKarainが、次第にMataraの妹の幻覚に憑りつかれ、現実の旅の辛苦から逃避するかのごとく恋慕の情を募らせていく。その想いが深化していった挙句、実際に復讐の対象であったはずのMataraの妹とその恋人を目の前にしたとき、妹に飛びかかった親友Mataraを撃ち殺す。その悲劇以降、Karainのもとを訪れる幻影は想い人ではなく、生前の親友であり自分が裏切って殺害したMataraとなる。KarainはMataraの霊との呪われた絆と己の犯した罪に苦悩している、と打ち明けたのだった。

Karainの物語は超自然、夢や幻、怪異といった想像力の産物に溺れることのない、科学的思考や合理主義を奉じ、物質文明を重視する堅固な西洋社会に対して警鐘を鳴らす。Karainの話のなかに蠢く‘vision’ ‘dream’そして‘illusion’は船上の空気をも次第に満たしていく（56）。

> The silence was profound; but it seemed full of noiseless phantoms, of things sorrowful, shadowy, and mute, in whose invisible presence, pulsating beat of the two ship's chronometers ticking off steadily the seconds of Greenwich Time seemed to me a protection and relief (56).

霊的な感覚、アウラ（夢想）、ダイレクトな生命感覚そして神秘感に呼応するKarainの身の上話は原初的で、クロノメーターが象徴する西洋的時間軸での物事の解釈の仕方へ揺さぶりをかけてくる。多元的時間の流れで、一つの事象の背後に蠢く不可視なものの存在に反応するKarainの姿勢は、規律や合理性、科学といった計測可能で可視化されるものに支えられている堅固な西洋的思考にとっては脅威である。白人の庇護を求めて駆け込んできたKarainの不可思議な話により、クロノメーターに象徴されている合理的世界観がその明確な輪郭を失いそうになりつつある。だからこそ、「私」はクロノメーターが確実に安定して刻む西洋的「時間」の流れに必死でしがみつこうとしている。

> Karain stared stonily; and looking at his rigid figure, I thought of his wanderings, of that obscure Odyssey of revenge, of all the men that wander amongst illusion; of the illusions as restless as men; of the illusions faithful, faithless; of the illusions that give joy, that give sorrow, that give pain, that give peace; of the invincible illusions that can make life and death appear serene,

> inspiring, tormented, or ignoble (56).

'the slave of the dead' と自身の苦しみを訴える Karain を語り手は上記のように考察する (58)。'To him his life – that cruel mirage of love and peace – seemed as real, as undeniable, as theirs would be to any saint, philosopher, or fool of us all' という文章から明白なように、語り手である「私」は、西洋的時間軸および物質文明主義のもとで生きる人間が失ってしまった多元的な生命感覚を、慄き苦悩する Karain の姿のなかに見出す (58)。幻影や亡霊、幻想や霊魂の存在を信じることも視ることもない西洋人を羨み、その力にあやかることを切望する Karain はこう述べる。

> [T]o whom day is day, and night is night – nothing more, because you understand all things seen, and despise all else! To your land of unbelief, where the dead do not speak, where every man is wise, and alone – and at peace (59).

幻影にとり衝かれ魂の平安を失った Karain が救済を求める姿を目の当たりにして、3 人の白人は困惑する。

> We felt as though we three had been called to the very gate of Infernal Regions to judge, to decode the fate of a wanderer coming suddenly from a world of sunshine and illusions. (60)

人間の営為とは過去と現在、未来の連続性のなかで流動的に構築されていくものであり、その意味で、人は誰も「過去」という亡霊、「現在」という錯覚そして「未来」という幻影と共存している。その生命感覚に押しつぶされそうになって苦悶する Karain の姿は、白昼の仮面的な虚構の生を演じる役者から、限りなく原初的な人間存在へと変貌している。

3. 超自然と多元性

我々が躊躇いなく「現在」や「現実」と呼ぶもののなかに過去の霊は存在しているにも関わらず、そういった生の直接的認識力や原初的力を喪失しているのが、科学的思考と物質文明に守られている近現代の人間の実態である。困惑する「わたし」と Jackson を尻目に、最も若い Hollis が Karain に魔除けとして護符を与えようと小箱を覗き込む情景は非常に示唆に富んでいる。

> And it seemed to me, during that moment of waiting, that the cabin of the schooner was becoming filed with a stir invisible and living as of subtle breaths. All the ghosts driven out of the unbelieving West by men who pretend to be wise and alone and at peace – all the homeless ghosts of an unbelieving world

– appeared suddenly round the figure of Hollis bending over the box; all the exiled and charming shades of loved women; all the beautiful and tender ghosts of ideals, remembered, forgotten, cherished, execrated; all the castout and reproachful ghosts of friends admired, trusted, traduced, betrayed, left dead by the way – they all seemed to come from the inhospitable regions of the earth to crowd into the gloomy cabin, as though it had been a refuge and, in all the unbelieving world, the only place of avenging belief ... (62).

秩序や規律、科学といった理知的で一元的価値観を拝し、堅固な世界という大いなる幻想を構築するために無自覚のうちに不可視のものに対する生命感覚を喪失した近現代人を、語り手は 'men who pretend to be wise and alone and at peace' とアイロニカルに表現している（62)。Hollis の機転のおかげで Karain は戴冠記念の貨幣（a Jubilee sixpence）の魔力を信じることで Matara の霊から解放される。その出来事の 7 年後、ロンドンのストランドで「私」と Jackson は偶然にも再会を果たす。

生命感覚を彷彿させるには程遠い、幻想も夢も幻覚も立ち入る隙間のないほどに喧噪で殺伐とした人々の群れが、Jackson の少年のような眼を通して描写される。

A clumsy string of red, yellow, and green omnibuses rolled swaying, monstrous and gaudy; two shabby children ran across the road; a knot of dirty men with red neckerchiefs round their bare throats lurched along, discussing filthily; a ragged old man with a face of despair yelled horribly in the mud the name of a paper; while far off, amongst the tossing heads of horses, the dull flash of harness, the jumble of lustrous panels and roofs of carriages, we could see a policeman, helmeted and dark, stretching out a rigid arm at the crossing of the streets (67).

奇しくも Jackson と「私」が立ち止まって Karain の話をするのは Bland という銃専門店の前であり、忙しなく蠢く人の雑踏の描写の最後には警官が登場する。銃は科学的思考や物質文明の発明品として象徴的な武器であり、警官とは法を代弁する存在である。いずれも堅固な枠組みで守られた西洋世界とその合理性を強調している。しかしながら次の Jackson のセリフが、亡霊や幻想が棲まない堅固な西洋世界に冷や水を浴びせるのである。

'Yes; I see it,' said Jackson, slowly. 'It is there; it pants, it runs, it rolls; it is strong and alive; it would smash you if you didn't look out; but I'll be hanged if it is yet as real to me as ... as the other thing ... say, Karain's story.' (67)

結論

科学技術や生命科学の研究といった、現代社会の知性に関する研究開発とその成果は人間の五感や身体能力を拡張し、人間的限界を様々な側面から限りなく克服させつつある。レンズ越しに人間の肉眼では確認できないほどミクロな世界を見ることができるし、あまりにも強力で歪んだ知性の集積体のようなインターネットは全方位的に人間の営みの舞台である地球を呑み込み、結果として余りにも楽々とそしてリアルタイムに我々は世界各地の情報や情景、多様な思想にアクセスすることができる。この世に実在するものでも、人間に本来備わっている能力の限界ゆえに我々が見たり感じたり認識したりすることが不可能だったものを、今では受動的に知ることができる。日々進化を遂げる最先端技術が我々人間に授ける自由や能力が拡がるほどに、人間はシステムに依存し、知らず知らずの内に自らが本来持っているはずの原初的生命感覚や霊的なもの、幻影といった神秘的かつ多元性に満ちた世界認識力を喪失または鈍らせていっている。

プラグマティックな現代社会には幻覚や幻、亡霊といった夢の世界や冥界に属する現象は顕現できない。なぜなら、亡霊や幻といったものは、瑞々しく原初的な生命感覚の持ち主のみが自身の意識下に蠢く情念のなかから創り出し、自身の魂が抱える恐怖や苦悩といった感覚をエネルギー源として自己の内部から外界へ排出する、いわばダイナミズムの形態だからである。

科学的にはその存在を証明できない幽霊に代表される超自然的現象とは、堅固な世界や合理性、科学の力に代表される文明という巨大で強力な幻影に惑わされている近現代人の姿を皮肉るメタファーとなっている。象徴的に霧を使い、幽霊や幻影、亡霊や夢といった言葉をこよなく愛し、たびたび超自然的現象を彷彿させるような描写をしたコンラッドである。科学の力で解き明かせない、人間の想像力のみが可視化する能力を持っている幽霊や幻と、作中の西洋文明の住人を接触させることで、物質文明主義という自己欺瞞的幻影に憑依されている近現代人の解放を意図したのだと考えられる。霊魂を信じず合理性を追求する現代社会が、不可視な現象に対する意識を研ぎ澄まし、原初的生命感覚を取り戻した暁に、ようやく人間精神に憑依した現代の亡霊は鎮められることになるのだと、“Karain”のラスト、Jackson のセリフは我々にそう告げている。

Bibliography

Primary Source

Conrad, Joseph. 'Karain: A Memory'. 'Heart of Darkness and Other Tales'. Ed. Cedric Watts. Oxford: Oxford UP, 2008.

---. *Notes on Life and Letters*. London: J. M. Dent and Sons, 1949.

---. *The Collected Letters of Joseph Conrad*. Ed. Frederick R. Karl and Laurence Davies. 9 vols., Cambridge: Cambridge UP, 1983-2007.

---. *The Mirror of the Sea and A Personal Record*. Ed. Zdzislaw Najder. Oxford: Oxford UP, 1988.

---. 'The Tale'. *Tales of Hearsay and Last Essays*. London: J. M. Dent and Sons, 1963.

Secondary Sources

Knowles, Owen and Moore, Gene eds., *Oxford Reader's Companion to Conrad*. Oxford: Oxford UP, 2000.

富士川義之・結城英雄編『亡霊のイギリス文学――豊穣なる空間』国分社、2012 年。

吉田徹夫『ジョウゼフ・コンラッドの世界――翼の折れた鳥』開文社出版、1980 年。

言語教育センター　2019年度　活動報告

1．会議

2019年 4 月22日 第1回言語教育検討委員会
2019年 4 月23日 第1回言語教育センター運営委員会
2019年 7 月 1 日 第2回言語教育検討委員会
2019年 7 月 2 日 第2回言語教育センター運営委員会
2019年 7 月25日 言語教育センター点検評価委員会
2019年 7 月29日 第3回言語教育検討委員会
2019年 7 月30日 第3回言語教育センター運営委員会
2019年10月 7 日 第4回言語教育検討委員会
2019年10月 8 日 第4回言語教育センター運営委員会
2019年12月 9 日 第5回言語教育検討委員会
2019年12月10日 第5回言語教育センター運営委員会
2020年 1 月 9 日（稟議）言語教育センター運営委員会
2020年 3 月23日 第6回言語教育検討委員会
2020年 3 月23日 第6回言語教育センター運営委員会

2．言語教育センター運営委員（2019.4.1 ～ 2020.3.31）

言語教育センター長	文学部（外・仏専）	眞下 弘子
教務部長	人間科学部（児教）	渡邊　均
言語教育センター主任	文学部（英文）	藤野 功一（英語担当）
言語教育センター主任	国際文化学部	新谷 秀明 （英語以外の外国語担当）
言語教育運営委員	神学部	日原 広志（前期） 才藤 千津子（後期）
言語教育運営委員	文学部（英文）	藤野 功一（兼任）
言語教育運営委員	商学部	鄭　義哲
言語教育運営委員	経済学部	加藤 眞理子
言語教育運営委員	法学部	奈須 祐治
言語教育運営委員	人間科学部	井上 久美子
言語教育運営委員	法科大学院	西郷 雅彦
言語教育運営委員	言語教育センター事務室長	園田 祐二

3．言語教育検討委員（2019.4.1 ～ 2020.3.31）

言語教育センター主任（英語担当）	文学部（英文）	藤野 功一
言語教育センター主任（英語以外の外国語担当）	国際文化学部	新谷 秀明
言語教育検討委員（英語）	文学部（英文）	藤野 功一（兼任）
言語教育検討委員（フランス語）	文学部（外・仏専）	眞下 弘子
言語教育検討委員（ドイツ語）	国際文化学部	中島 和男
言語教育検討委員（中国語）	国際文化学部	新谷 秀明（兼任）
言語教育検討委員（イタリア語）	国際文化学部	山田　順
言語教育検討委員（その他の外国語）	国際文化学部	津田 謙治

4．言語教育センター外国語教員

山　田　　泉	助教（英　語）
今　川　京　子	助教（英　語）
萱　嶋　　崇	助教（英　語）
矢　倉　喬　士	助教（英　語）
ロバート　プレスラー	助教（英　語）
王　　宇　南	助教（中国語）
栗　山　雅　央	助教（中国語）

5．行事

2019 年 4 月 10 日　語学ラボ・有料対策講座説明会
2019 年 4 月 15 日　「超」感覚 TOEIC 基礎講座
　　～ 7 月 16 日
2019 年 4 月 25 日　TOEFL ITP 試験対策講座
　　～ 7 月 16 日
2019 年 5 月 22 日　TOEFL ITP テスト（228 名）
2019 年 5 月 21 日　TOEIC 600 点突破講座
　　～ 7 月 10 日
2019 年 6 月 22 日　TOEIC IP テスト（1,271 名）
2019 年 6 月 19 日　TOEFL ITP テスト（401 名）
2019 年 7 月 13 日　TOEIC IP テスト（107 名）
2019 年 7 月 17 日　TOEFL ITP テスト（207 名）
2019 年 8 月 19 日　IELTS 対策講座
　　～ 9 月 13 日
2019 年 9 月 4 日　TOEFL ITP テスト（109 名）

2019 年 9 月 17 ～19 日　夏季 TOEIC 対策講座 480 点クリアコース
2019 年 9 月 24 日　TOEIC 600 点突破講座
　　～ 11 月 26 日
2019 年 11 月 9 日　TOEIC IP テスト（1,261 名）
2019 年 11 月 20 日　TOEFL ITP テスト（368 名）
2019 年 11 月 27 日　第 7 回英語暗唱大会
2019 年 12 月 11 日　第 4 回フランス語暗唱大会
2019 年 12 月 14 日　TOEIC IP テスト（229 名）
2019 年 12 月 18 日　第 11 回中国語暗唱大会

「言語教育センター紀要」刊行要領

１．名称

本紀要の日本語名称を「西南学院大学言語教育センター紀要」とし、その英語名称をCenter for Language Education:　Annual Review of Language Learning and Teachingとする。

２．目的

本学の言語・文化教育に関する研究や授業実践報告を刊行することによって、本学における言語・文化教育全般の質の向上を図ることを第一の目的とする。また、センターの活動報告及び本学の言語・文化教育に対する全学的な意見交換の場を提供する。

３．掲載対象

掲載対象は、言語・文化教育に関するものとし、本学の言語教育センターにおける教育に資するものとする。

４．執筆資格

本紀要の執筆資格者は以下の者とする。

１）本学の言語教育センターに所属する外国語教員

２）本学の専任教員で言語教育センターの運営に関わる者

３）本学の言語教育センターが提供する科目を担当する非常勤講師（ただし、上記１）又は２）に該当する者との共同執筆で、１）又は２）の教員がファースト･オーサーのものでなければならない）

４）上記以外の者で言語教育センター長が認めた者。

５．原稿の制限

原稿は未公刊のものに限る。

６．発行回数

発行は年１回とし、３月１日付けで発行する。

７．著作権

著作権は言語教育センターに帰属し、複製あるいは転載する場合には、言語教育センターの文書による承認を受けるものとする。

８．投稿方法及び締切

投稿締切日は発行年度の１月 10 日とし、別に定める執筆要領に従って作成した原稿を電子ファイル及びハードコピーにより言語教育センターに提出する。

「言語教育センター紀要」執筆要領

1．書式・長さ

・和文・英文とも横書きとし、１頁の行数を35行程度とする。また、和文の場合は、１行40字程度、欧文の場合は1行80字程度とする。

・論文等の原稿は原則として20頁を上限とする。

2．表題・著者名等

・表題は1頁目の1行目に中央寄せで記載する。

・１行あけて、著者名を右寄せで書く。著者名が複数の場合も全て同様とする。

3．要約（アブストラクト）

・要約（アブストラクト）は一つのパラグラフで構成し、和文の場合は600字程度、欧文の場合は200語程度にまとめる。

4．本文の構成

・本文は節単位の構成とし、節ごとに1．からアラビア数字で番号をつけ、節の表題を記載する。

・一つの節が終わったら次の行は1行あけて書き始める。

5．注・参考文献

・注（Notes）は脚注を用いず、後注とする。

・参考文献は、論文等の最後に和書・洋書共に著者名のアルファベット順に一括してあげる。同一人物の文献は年代順に古い方から記載する。

6．図・表について

・図･表には､｢図１｣（Fig.1)､｢表１｣（Table 1）のように番号をアラビア数字で記入し、タイトルを付ける。タイトルの文字は本文と同じ文字を使用する。

西南学院大学　言語教育センター紀要　第 10 号

発行日　2020 年 3 月 1 日

発行者　言語教育センター
〒814−8511 福岡市早良区西新６丁目２−９２
TEL 092-823-3309　FAX 092-823-3383

印刷所　株式会社　キャンパスサポート西南
〒814−0006 福岡市早良区百道１丁目１４−２９
TEL 092-823-3271　FAX 092-823-3272